13－3　民芸調家具の開発研究

菊地・上原・堀切
末吉・田原・恵原

1　はじめに

現在、全国各地に民芸家具と呼ばれる家具の産地が存在している。しかし、これらは必ずしも産地としての古い伝統の上に成り立っているものではなく、むしろ戦後に産地を形成したものが多い。今日、家具業界に於いても大量生産優先の物作りがなされる中で、これに飽き足らないとする人々に手作り志向、本物志向が受けて、安定した市場を得てきた。

一方、本県に於いては屋久杉家具業界があり、広く全国に知られ技術の蓄積がなされてきているが、屋久杉材の入手には質、量の点で今後に問題があり、何らかの転換の必要性を唱える人は多い。

このような中で、ローカル性豊かな鹿児島民芸調家具を開発し、関係業界の活性化を図るものである。

2　事業概要

本研究は昭和56年度からの引き続きで、3年間に渡って取り組むものである。

(1)　初年度

製品化のための可能性の確認と方向性の把握のため、既製民芸家具あるいは伝統的和家具等にみられる普遍的製品を参考に、小型の民芸家具を試作し次の5点について検討した。

1)　加工性
2)　面ぶち
3)　全体の形態
4)　色調及び表面処理、塗装
5)　引手（材質、サイズ、形態）

(2)　第2年度（今年度）

研究会を開催し業界、学識経験者等との意見交換を行ない、初年度の結果も踏まえて鹿児島民芸家具としての方向性を検討。中型家具を中心に試作。

(3)　第3年度（最終年度）

製品の種類をさらに増やして、収納用品のセット物の試作、ユニット性の検討、脚物製品の試作、開発、総合検討、流通調査、技術移転

3　材　　料

民芸調家具においては、材料が製品を特徴づける大きな要素となる。そこで次の点について検討した結果、初年度に引き続きクス材を使用することになった。

(1)　材料による地域性（ローカル性）

クス材は南九州に広く分布し、特に本県が全国一の蓄積量を誇る。また、郷土の木として広く県民に親しまれている。

(2)　材料の安定供給

(3)　民芸調家具としての材質

材に精油分を含んでいるため水湿によく耐え、耐朽性耐虫性はきわめて高く、また材に含まれる樟脳が防虫の役割を果たし、古くから箪笥、長持のような収納家具に使用されている。

(4)　加工性

(5)　着色性

材料については、一樹種に限定せずに、巾広く考えようという方向にあり、本年度は一点については杉を用いて試作した。

4　デザイン

民芸調家具として考えられるスタイル（形態）を既存の家具によって分類してみると、次のようになる。

(1)　いわゆる“民芸調家具”（洋風）

(2)　アーリーアメリカン風（質素、頑丈）

(3)　京、江戸風（優雅、高い技術）

(4)　舟箪笥風（補強金具使用、きわめて頑強）

これらのいずれの方向をめざすのか、あるいは全く異なったタイプをめざすのか、はたまたこれらのミックスタイプで行くのかの検討は、結論を出すに至っていない。

本年度は、一つのタイプに絞らずに、いろいろなタイプについて検討するために、それぞれの個性を出して試作した。

5　塗装・調色

調色については、次の4つの方法を試みた。

(1)　焼杉加工処理

杉の製品について

(2)　薬品着色

ログウッド5％溶液塗布、乾燥後重クロム酸1％溶液を塗布し両者の反応で着色。これに水性着色剤を更に塗布して希望の色に合わせる。それ程濃く着色せずに、しかも重厚な感じに仕上げる。

(3)　目止着色

ポリウレタン樹脂をベースに黄とのの粉、緑青、紅柄、

松煙、万能着色剤等を混入し、道管に充塡して着色、材質感を強調。

4) シャリンバイによる着色（草木染め）

本県特産としてあまりにも名の知られた大島紬の独特な染色に用いられるシャリンバイによる着色である。（シャリンバイを一昼夜煮沸した原液は紬の染色用）

工　　程

シャリンバイ濃縮液等により着色
↓
ウレタンサンディングシーラー塗布
↓
サンドペーパー　＃320にて研摩
↓
ウレタン3分艶　吹付塗布（2回）
↓
摺漆　朱合漆5：テレピン油5
↓
摺漆　朱合漆4：テレピン油（2回）

着色方法は次の組合せによる

1) シャリンバイ濃縮液（$\frac{1}{3}$濃縮液、$\frac{1}{5}$濃縮液）

2) 水性着色剤（ダークオーク、ダークブラウン、ダークマホガニー）（5，10，30%）

3) ログウッド（5　10，15%）、木酢酸（10%）

着色は、(1)の単独によるもの、あるいは$\frac{1}{5}$濃縮液のものに(2)又は(3)の着色剤を混入したものを塗布。

他の産地では見られないこの独特な着色方法により、ローカル的な特徴を得るものであり、クス材における深みのある落ちついた色調を付与した。

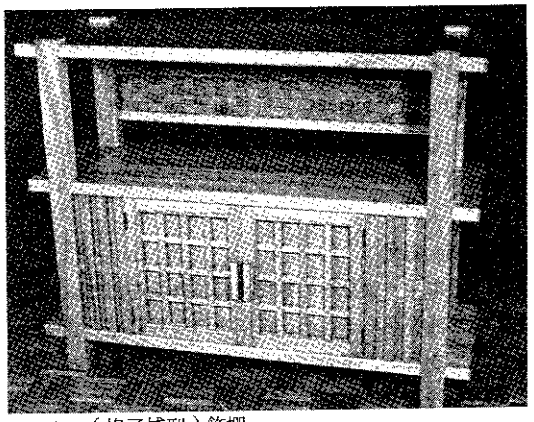
6　結果、考察

図1～6に示す製品を始め16点の試作品を得た。製品としての可能性をみるため、方向をある程度絞らずに研究を進めてきたが、開発理念の大筋は下表に示すとおりである。

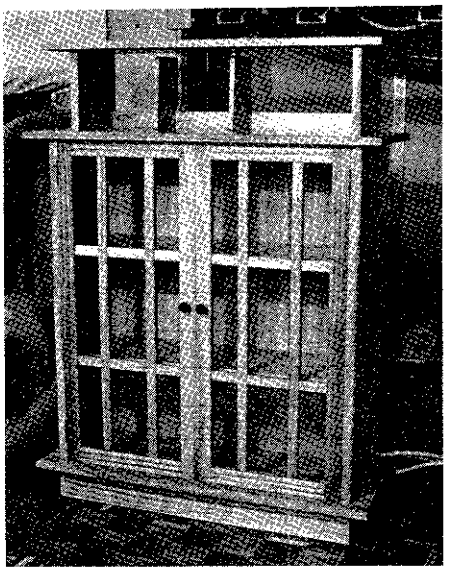
今後、形態、色調等は少しづつ絞って統一あるものに進めて行く反面、材料についてはクス材のほか本県を特徴づける他の樹種（離島産材等）及び、針葉樹、集成材の使用まで巾広く考えることが出来る。そのためには、各材料の乾燥技術、加工性、接着性、表面処理、調色技術等についても十分に取組まなければならないものと考える。

	現在市場へ出回っている民芸家具		今後開発する鹿児島民芸調家具	
〈背景〉	年寄り向けである。若い層に受けない（市場性の傾向：若者に受ける製品が市場を制す） 大物売れない（都市生活―狭い住空間） 本物志向、物離れ（持たない）		購売層である20～30歳代にも受け入れられる製品の開発 狭い空間への対応→小型、中型主力 タイムレス（時代を越える製品）	〈対策〉
	仕　様	問題点	仕　様	改善点
スタイル（形態）	シンプル，直線的 伝統的洋家具風 あるいは和家具風 面ぶち切面	産地間の特色薄い	素朴，頑丈，武骨，朴訥	ローカル色（地域性・風土性）を強調
材　料（樹種）	無垢板（ソリッド材） オーク，カバ ケヤキ，ミズメ 桐（引出し）	高価格	無垢板 クス イタジイ，タブ 針葉樹，桐（引出し）	一つに絞らない，商品により使い分ける
引　手	木製挽物 金具（手打ち等）	一部を除いて特徴薄い	木製挽物 金具（オリジナル品）	←国補事業にて開発
色　調	濃色・重厚	重苦しい	シャリンバイ等による草木染め，他	やや明るい色調に

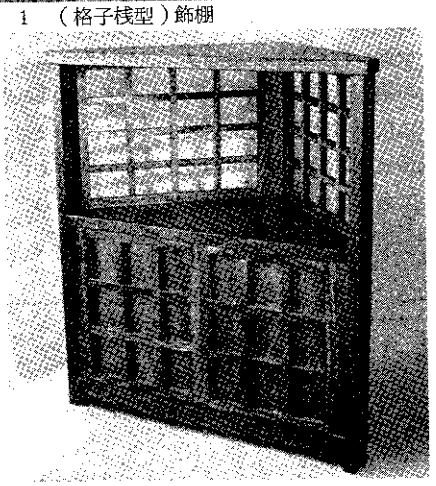
試 作 品 例



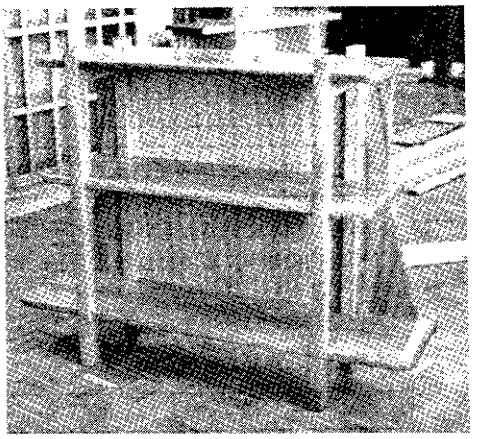
1 （格子桟型）飾棚



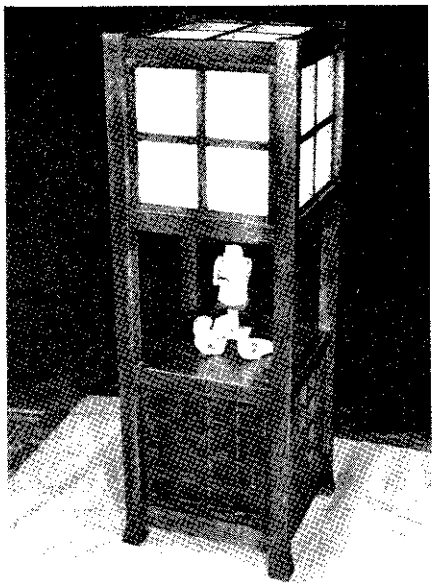
2 書棚兼用飾棚



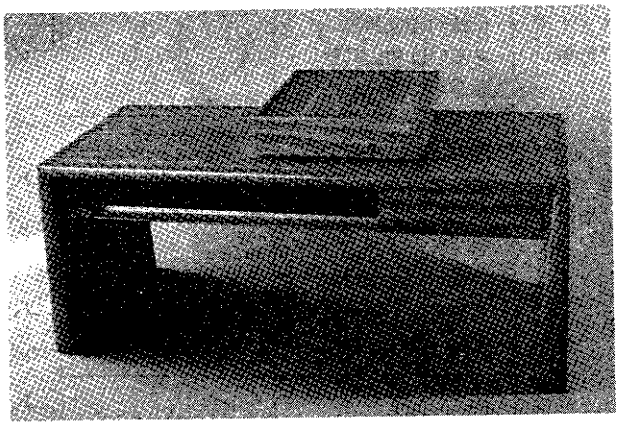
3 隅　　棚



4 （三段型）飾棚



5 照 明 棚



6 文　　机